

## 目次

インタビュー「好き」の壁を越えて(海東 奈月)	1~3
寄稿 留学体験記(渋谷 彩)	4・5
2011年冬 留学説明会報告	6・7
専攻紹介 Lesley University 表現療法学科音楽療法専攻(高井 暁)	8
学部紹介 University of Colorado at Boulder 航空宇宙学科(山口 晋弘)	9・10
寄稿 米国大学院でしか学べないこと(伊藤 公平)	11

第8回ニュースレターのテーマは、留学の「多様性」です。様々な人がそれぞれ異なるきっかけで、異なる分野で夢を追いかけています。今回は、NBAのDallas Mavericksでダンサーとして活躍されている海東奈月さんにインタビュー致しました。そのインタビューの模様を紹介します。ダートマス大学・渋谷彩さんによる留学体験記、レズリー大学・高井暁さんによる学科紹介、そして、コロラド大学・山口晋弘さんによる学部紹介をお送りします。当会顧問の慶應義塾大学伊藤公平教授から激励のお便りを頂きました。なお、2011年冬に行った大学院留学説明会に関する報告も含まれており、盛りだくさんの内容でお送りします。2012年もニュースレター「かけはし」をよろしくお願い致します。

## Interview: 「好き」の壁を越えて

2011年、NBA Championに輝いたDallas Mavericks。そのチームに、今ダンサーとして活躍する一人の日本人がいます。海東奈月(かいとう・なつき)さんです。6年間の社会人生活の中、名門鹿島ディアーズでチアリーディングを行った後、2010年にNBAのDallas Mavericksのステージで踊るため渡米しました。現在の功績を「成功ではない。」と話す海東さん。アメリカに来るときの決意やダンスへの思いを伺うことができました。海東さんの生き方から、海外留学で必要となる精神や考えが見えてきます。

**写真右:**直筆サイン付きポスターを海東さんから頂きました。海東さんはポスター右上です。

※インタビューは1月31日に海東奈月さん、当会の平林正稔、齋藤功の3名で行われました。

**Q:**鹿島ディアーズで活躍されていた頃について聞かせてください。

**A:**2004年から2009年間の6年間、所属していました。私のチームは企業チームで、仕事をしながら週に3、4回練習していました。2年目から副キャプテンを任せてもらって、4年目にはキャプテンをやっていました。



## Interview: 「好き」の壁を越えて(続)

**Q:なぜ鹿島を離れてNBAにくることを決意されたんですか?**

A:大学時代の話になるんですけど、私の大学(桜美林大学)は毎年優勝するくらいの強豪チームなんです。強豪校だけに高校生からすごい子たちがきていて、体力や基礎からかなわないところがありました。試合となると補欠だったりしていましたね。よく4年間続けたなって思います。その後もやめませんでした。自分に満足していなかったのでしょう。こういうのって「好き」だけでは続かないと思うんです。私、昔からすごくまじめに練習やるんですよ。みんながやめても続けているから、最終的には1番になるんです。話を戻すと、鹿島入社当時はゼロ以下から始まったけど、だんだん成果が出始めるようになりました。だから、先に言ったように4年目でキャプテンになりました。でも、5年目になっていつも後輩に怒ったり指導したりしていると、もう一度自分を見つめたいって感じるようになりました。でも、日本で一番になったでしょ。だから国内にその場所はありませんでした。それで、アメリカだなんて。ステータスがあるアメリカで自分を確立したいと思うようになりました。そして、ふと仕事中に私がユニフォームを着ている姿を思い浮かべたんです。そうすると、すごくドキドキしてきてしまって。だから、鹿島のチアには自分の想いを託して身を引くことを決意しました。

**Q:周りの反応はいかがでしたか?**

A:口に出して自分にプレッシャーをかけることで目標を達成できる、と私は考えています。鹿島に所属していたときから、鹿島より高い目標がないと鹿島でも成長はないって思っていました。だから、周りの人には結構言っていましたね。「行く」と決めたときも、周りの人は「やっとならんだね。」というような感じでした。一方で、何も知らない人からは「アメリカ行く前に、嫁にいけ。」と言われてたりもしましたが、両親からも最初はよい反応はもらえませんでした。合格すると応援団としてすごく張り切っていました。笑

**Q:決意したときの心境はいかがでしたか?**

A:無知でしたね。NBAのコートで踊ることしか考えていませんでした。何にも知らないから来れたんだろうと思います。すでにいい年齢だったし、もし何か知識があれば来ることには臆病になっていたでしょうね。このまま嫁に行った方がよかったのかなとか、社会人生活を満喫してもよかったのかな、とかオーディション行くときにちょっと考えたりもしました。でも、決意した後に飛行機のチケットを先に買って、その後すぐに会社に辞表出したので身動きできないようになっていましたね。だから、それ以上後ろを振り向くことはなかったと思います。順番がはちゃめちゃでしょ。あの時のパワーは、長い間うだうだしていたからこそ爆発したものだと思います。

**Q:オーディションについて教えてください。**

A:Dallas Mavericksの他に、Boston CelticsとNew York Knicks,



Dallas Mavericks Dancers 海東奈月さん

Los Angeles Clippersを受けました。Mavericksが一番志望だったけどオーディションがNBAの中でも最後の方だったので、場数を踏みたかったというもありこれらのチームも受けました。ニューヨークに一ヶ月滞在しました。オーディションやアメリカ生活がどんな感じか知るいい経験となりましたね。例えば、オーディションに行ってみると白人でも日焼けをしているとか。また、各チームの雰囲気も知ることができました。Celticsはジャズ系で黒人は少ない感じでした。Clippersはヒップホップが入るけど、LAだけにダンスの基礎があります。Knicksはアクロバティックな感じですね。チームによって人種の比率が違ってきます。

**Q:Mavericksのオーディション中、「本番中は大丈夫」という自信があったとのことですが、どういったところからこのような心境が生まれたんですか?**

A:会社も辞表出していたし、他のチームからも合格をもらうことはできませんでした。日本に帰っても働く場はないし、落ちたというので帰らなくなかったです。だから必死だったのかな。でも、ダンスは自信がありましたね。慣れてきたこともあったりして、浮き足立つ所はなかったですね。オーディション中は、純粋な気持ちで踊っていました。でも、今は正直、雑念でいっぱいかもしれません。だから、正直辛い。当時に戻りたいってすごく思います。

**Q:雑念とは、どういうことですか。**

A:1年目になると私はベテランで、ルーキーが入ってくるでしょ。20人のチームの中で、ひと試合で踊ることができるのが12人くらいなんです。毎回、試合前にオーディションがあるんです。自分もうまく踊れているって思っているけど、選ばれないときがあるんです。試合中にメインのダンスを踊れないとか、結構屈辱なんです。チームに合流しているいろいろ気づき始めるようになってから、だんだん初年度のオーディションの時のようなダンスはできなくなってしまいました。踊っているときにディレクターの視線を気にしてしまったりして。



Q:このような悔しさの中で、ダンスを続けたいと思わせる感情は何ですか。

A:悔しいと思う気持ちが向上したいという気持ちに変わります。いつもうまくいっていると向上心なんて生まれません。最近、たくさん練習してもうまくできないと、踊りたくないって思ったりします。練習後や試合前にジム行って踊ったりすると、涙が出てきて本当に辛いんです。でも、立ち止まるのも悔しいんですよ。ネガティブな部分が逆に自分を押ししています。よく考えると鹿島でもそうでしたね。外から見られると華やかに見えるんだろうでしょうけど、98%が辛さで2%が喜び。なんでここまでして、ここにいるんだろうって感じる時があります。でも、小さな拍手とかほんと些細なことが私を支えるんですよ。そういった喜怒哀楽がはっきりしている生活が好きなんだろうと思う。ちゃんとネガティブな面がないと。

Q:将来に光みたいなのは見えますか？

A:つねに目標を持っていることが重要なんだと感じます。ダンスって数字で示す確かなジャッジがありません。今も試合に出させてもらってはいるけれど、やっぱり100パーセント満足したいし評価してもらいたいんです。今は高い評価をもらえる方法を探している、というところですよ。一つの答えとして新たなチャレンジをしたいと考えています。上がある限り。

Q:成功をされた海東さんにとって、今は試練のときなんですね。

A:成功って言ってもらっているけれど、私は自分が成功したは思っていないのよね。目標達成はできていると思うけれど。

Q:目標を見て前に進んでいるから、今の状況は成功ではないということですね。海東さんにとって「成功」とはなんですか。

A:最近、よくこれを考えます。例えば、45歳にもなってオーディション受けますか？年齢制限はなくても、今のメンバーの最年少が21歳です。体は今は締まっているけど、そのときは分からないでしょ。だから、ダンスできるのってせいぜいこれから2年くらいかなって思っています。でも、それを終えたときに、果たしてダンスじゃなくて何を目標にするのかなって思ったりします。ただ、今までもそうだけど、今を精一杯やっているって次第にやりたいことが見えてくるんです。

Q:海東さんにとって友人はどのような存在ですか。

A:周りの人たちから受ける影響って本当に大きいんです。日本の友人とアメリカの友人は違うし、そういった人たちの影響で私自身の考えも変わってきました。今は、頑張ってる努力しているいい気を持つ人と多く関わることができるようになりました。すごくいい人達に巡り会えていると思います。生活もすごくシンプルになりましたしね。

Q:非常に充実しているんですね。

A:充実について言うと、何が充実してるんだって思う所もありますよ。家事をして練習をしてっていう生活が毎日続くわけですから。試合の日も同じです。だけど、気持ちが満たされていて、雑念だらけで

踊っているわりには、私生活で雑念というのはないですね。ダンスが軸にあり、それに沿って生活しているから無駄なことがないんです。日本ではそうではありませんでした。こちらに来てから、人間関係や持ち物、生活が変わりました。ダンスが崩れるとすべてが崩れる感じになりますが、それでも今の生活は楽しいですね。本当に自分に何が必要か分かってきた気がします。日本にいたら変わっていなかったでしょうね。

Q:チームメイトとの関係って、どんな感じですか？

A:強い繋がりで繋がったチームメイトです。例えば、私はコミュニケーションが完全ではないのですが、チームメイトがダンスについて「すごく上手だったよ!」って言いに来てくれたり、試合に出ると「Natsukiが本番出られるようになって、本当に嬉しいよ!」って言ってくれたりします。美人は性格が悪いっていうじゃないですか。でも、本当は逆だって思います。心って表面に出るものですよ。心から素直に笑える人ってそれだけ外見もきれいなんですよ。私の場合、最初は逆に悔しくてできませんでした。でも、みんなからそういう所を学んで今では私も素直にチームメイトの成果を喜べるようになりました。ライバルだけど本当にいいメンバーです。

Q:今後、どのように進まれる予定ですか？

A:自分に需要がある限りは自分を売り込んでいきたいし、アメリカで新たなチャンスに挑みたいと思います。日本に帰るかはまだ分かりませんが、踊れる限りはこちらで踊りたいですね。アメリカ人に勝ちたいのでしょうね!

Q:このような気持ちにされている根源は何ですか？

A:乗り越える壁がものすごい高いからかな？並大抵の努力じゃ越えられないんですよ。でも、挑み続けたいんです。いつも悔しくて泣いているんですけどね。高いところを望むことで自分を見つめられるしね。

Q:最後に、読者にメッセージをお願いします。

A:違う文化を知ることと日本を知ることができます。また、人間の幅も広がります。こちらに来て、外見違っていても内面は同じなんだなってよく感じる。国は違えど人は同じであるということ、若いうちで学んでおくのは良いことだと思います。若いからこそ吸収力もあるし、その経験を生かす時間も広がると思います。私は28歳で来たんですけど、皆さんのような団体に出会ってれば、もっと早い時期に来ていたと思います。そして、もっと視野を早い段階で広げることができたと思います。こっちのチームメイトで大学に通いながらの人もいるけれど、本当に大変そうです。本当に勉強しているんだなって感じます。もし、ちょっとでも海外を考えるなら海外の荒波にもまれるのはいいことだと思います。苦労すればするほど、人生は充実するし自分自身を強くすることができます。だから、もし留学を考えているんだったら、今チケット買しましょう。

## 寄稿：留学体験記

留学を実行する上で、障壁となるものの中に、将来のキャリア・お金・英語など不安点は様々あると思いますが、「恋人・家族」という存在も大事な要素です。今回は、ご主人が大学院留学をするのをきっかけにご自身も渡米され、その後、大学院合格に成功した渋谷彩さんによる留学体験記です。

## 理由はさまざま

私が大学院留学を決意したきっかけは結婚でした。結婚が決まった当時、主人はダートマス大学でPh.Dコースに所属しており、一方、私は日本の製薬企業で研究職をしていました。もともと結婚願望があったので、結婚、渡米に迷いは無かったものの、せっかく日本で築いてきたキャリアを諦めてアメリカで専業主婦をするのは、少々もったいないと感じていました。また、主人が大学からもらっている給料だけで二人暮らすのは、かなり切り詰めないで厳しく思えました。そこで、アメリカでも日本と同じような理系の仕事ができればよいと考えて、最初はアメリカの企業での研究職を探しました。しかし主人の所属するダートマス大学はニューイングランド地方の田舎にあり、住民は大学関係者かりタイアした高齢者がほとんどで、大学近辺で研究職に就けそうな会社はありません。そこで周辺都市に範囲を広げて探してみましたが、近くの比較的大きな都市に行くにも車で片道1時間、一番仕事がある可能性の高いボストンまでは片道2時間半かかるため、会社にアプライするのは現実的ではないことが分かりました。日本であれば片道1、2時間の通勤も少なくないと

と思いますが、日本と違うのは都市と都市の間が距離的にかなり離れていて、その間を移動する手段は専ら車だということです。電車で一時間通うのと車で通うのとではかなり負担が違います。また、外国人がアメリカの会社に就職するためには就労ビザを取得する必要があり、民間企業ではビザの取得数に制限があるため、よほどその外国人が優秀であったり特別な技能を持っている限り就労ビザの取得は難しいと感じました。私の場合、英語に全く自信がなかった上、特別アピールできる技能もないため、結局民間企業の就職はあきらめました。(よく日本の友達に、マクドナルドでバイトすればいいじゃないか?と言われましたが、配偶者ビザではアルバイトはできません。)とはいえ、私の知り合いにご主人のアメリカ留学について来た後、自分で仕事先を見つけてこちらの企業で働いている奥さんもいますので、一概に企業就職が難しいという訳ではないと思います。渡米先の立地条件、語学能力、アピールできる能力、積極性など就職するにはいろいろ条件が必要ですが、何事も本人の行動力次第のように感じます。さて、ではどうしようかと考えたとき、製薬企業で研究職として働いていたころ、自分には医薬分野に対する専門性が足りないと日々感じていたことと、アメリカの大学院博士課程ではスタイペンドと称して収入が得られること、またPh.D取得が今後のアメリカでの就職に有利になることを考慮して、主人と同じダートマス大学に行くことを決意しました。

## その後、大学院受験

私の大学院受験は、ストレートにはいかず、結局2回行いました。受験一年目は日本の会社に勤めながら、TOEFLやGREの勉強、パーソナルステートメントなどの準備を行いました結果は不合格でした。敗因としては、私の性格上、会社の仕事と受験勉強を2つ同時にすることができず、TOEFLなどが必要最低点に達しなかったことが大きかったと思います。受験二年目は一年目の反省点を生かし、大学院受験にだけ集中したいと思い、会社を辞めて渡米することにしました。この際、単にアメリカで受験勉強するだけでなく、こちらの大学院で研究の経験を同時に積みたいと思いました。そこで、受験予定であったダートマス大



写真1 Dartmouth大学のキャンパス風景



学の教授陣に、彼らの研究室で研究できないか聞いて回ったところ、運よく受け入れてくれる教授を見つけることができました。ダートマス大学は、大学の方針として、博士号を持たない外国人には研究員としてのビザのサポートをしないという厄介なルールがありましたが、雇ってくれた教授とインターナショナルオフィスの偉い人がサッカー友達だったこともあり、いろいろな例外を適用してもらって幸運にも1年間のビザサポートを得ることができました。所属した研究室では、しっかりしたプロジェクトをもらって研究するという、大学院生のような待遇を受け、さらに大学院生と同程度の給料まで頂くことができました。その上、聴講生として大学院の授業にも出席させてもらえました。この経験は後に大学院での選考に有利になっただけでなく、アメリカの大学院がどういうものか、事前に知るよい機会となりました。

ダートマス大学で1年間研究員(ビザサポート有り)をして、大学の授業を聴講したり給料をもらうことができた。その後、ラボでの働きを評価されて、大学院に合格。

周りには、給料なしで研究経験を積むために研究員をやっている人が多くいる。

結局この一年間のラボでの働きを教授が高評価してくれたことが決め手となり、翌年、無事ダートマス大学に合格することができました。私は運よく雇用と言う形で給料をもらいながら研究させてもらえましたが、周りを見ていると研究経験を積むために、ボランティアとして無償で研究室に出入りしている人(外国人含む)も結構います。もし理系分野の大学院留学を目指している人で、研究経験が足りないと思う人がいれば、こういう形で直接アメリカのラボで研究経験を積むという作戦もいいかもしれません。(但し、ビザの問題をクリアする必要があります。)

私のような経路をたどって留学を決意し、実現した人はかなり稀だと思います。今回、ニュースレターの留学体験記の執筆依頼をいただいたとき、是非私の体験がさまざまな理由で留学を考えている人たちのお役に立てればと思い、お受けすることにしました。私は個人的に、アメリカに自分の研究分野で世界的な権威を持つ教授がいるから留学したい、世界中の研究者が集まるアメリカの大学で世界を舞台に勝負したいなど、研究に熱い思いを持ってアメリカの大学院を目指す人達ばかりでなくともいいように思います。例えば、大学を卒業して会社に勤めた後も

う一度勉強したくなったり、経済的に余裕がないけれども大学院に進学したいという人にとってアメリカの大学院は良い選択肢の一つになると思います。なぜならアメリカの大学院では一度社会にでてから大学に戻ってきた人が少なくなく、多くの大学院が授業料を免除している上に生活費を補助してくれるからです。特筆すべき点は、大学院生が多様なバックグラウンドを持っているところだと思います。国籍も、年齢も、大学に来た理由もバラバラな学生が集まって研究に対する議論を交わすことができるのは、やはりアメリカならではだと思います。結婚がきっかけで、収入が得られるからというのが主な理由でアメリカ大学院に来た私でも、今ではやりたい研究が見つかり、この歳でまだ勉強だけに集中できる日々を送れることに感謝しています。まだやりたいことが決まっていなくても、単にアメリカで勉強してみたい、というくらいの人でも留学に挑戦していいのではないのでしょうか。



渋谷彩(しぶや・あや)  
Dartmouth University  
分子細胞生物学、Ph.Dプログラム所属

補足:アメリカで長期滞在するためには、ビザの問題をクリアする必要があります。配偶者は自動的に配偶者ビザをもらえますが、研究で給料をもらうためには、自分の学生ビザ(F)もしくは、交換留学生・研究員ビザ(J)をもらう必要があります。ビザに関しては、過去のニュースレター(第4号・第5号・第6号)で取り上げてあるので、参照されたい。

## 留学説明会：報告

2011年12月に日本全国6大学で留学説明会を行いました。日本国外で修士号・博士号を取った留学経験者が講演者となり、パネルディスカッションを行いました。理系・文系など様々なバックグラウンドを持った留学経験者が一堂に会し、各会場ごとに異なる講演の色を紹介いたします。また、財団法人・船井情報科学振興財団を初め、本説明会に支援をして頂いた各団体・個人の皆様に深く感謝の意を表します。

### 早稲田大学 2011年12月14日

今年も早稲田大学にて、二度目となる説明会を新大久保(理工学部)キャンパスにて開催致しました。約150人の学生に参加して頂きました。講演者にはカーネギーメロン大学に在学しフトソン君という人工知能を持つロボットをIBMと共同研究開発することでCBSにも紹介された嶋英樹さん。他、ヨーロッパへの留学の可能性についてスイスで修士を取得中の高野淳さん、スタンフォード大学在学中の石綿が話しました。3人とも早稲田大学を卒業していることから早稲田大学に在学している学生にも親近感が湧く話が出来たかと思えます。パネリストには当会会長の小野雅裕も参加し、たくさんの質問に情熱を持って的確に答えることが出来たかと思えます。ご協力頂いた大学の関係者の皆様、及び参加頂いた方々に感謝いたします。

石綿整

### 東京大学 2011年12月18日

東京大学卒業生室との連携のもと、通算5回目となる説明会を開催しました。会は前回の形式を踏襲し二部構成とし、第一部に講演を、第二部に文理別の質疑応答を行いました。約240名の参加者の中には、すでに複数回留学説明会にいらしている方もおり、特に説明会終了後の懇親会では非常に具体的な質問が数多く出されていました。講演者・パネリストも前回に増して多様なメンバーが揃いました。地域別には米・英・加・独の4カ国、留学歴別には一年目から卒業後日本で就職している方まで、11人に集まっていたき、幅広い内容をカバーすることができました。日本にいる学生にも、留学している学生にも、ともに説明会が認知されてきていることの表れだと思っています。

飯山悠太郎

### 慶應義塾大学 2011年12月16日

慶應の説明会は約70名程の参加を頂き、大変な盛況を収めました。四名の学位留学体験者をお招きし、それぞれ入学手続き、入学後から博士号取得まで、そして博士号取得後のキャリアについて語っていただき、学位留学の包括的な情報を提供して頂きました。また、各人の留学の動機、そして恋愛論など個人的な話など大変興味深い情報も提供していただきました。講演後のQ&Aセッションでは講演者に加え、3名の学位留学希望者が加わり、計7名で会場からの質問に答えました。参加者からの質問が絶えず、英語学習から、実際の入試の現状、卒業後の進路の選択など幅広い質問が飛びかい、予定時間を1時間以上上回る盛況ぶりでした。説明会を通して、参加者の方には、学位留学体験者と直接話を聞く機会を設け、学位留学という選択肢をより現実的なものとして考えていただけたと思います。慶應では毎年一度は留学説明会を開催していく予定です。今回、都合が付かず見逃してしまった方も次回は是非お越しください。

広瀬雅



早稲田大学 講演の様子



## 京都大学 2011年12月22日

2回目の開催となった京都大学会場では、約80名の方に参加していただきました。初回開催と同様、講演者として現役学生と社会人の方をお招きし、それぞれ違った視点から熱い留学体験談を語っていただきました。質疑応答セッションでは、なんと高校生の方から質問をいただき、会場が大いに盛り上がりました。説明会終了後、留学生の前に質問をするための長蛇の列ができるなど、意識の高い参加者の方が多かったように感じました。

渋谷洋平

## 大阪大学 2011年12月26日

大阪大学国際教育交流センターのご尽力のもと初開催となった大阪大学会場では、小雪が舞う天候にもかかわらず100名以上の方に参加していただきました。講演者、パネリストには文系、理系、女性、男性バランスよく配置することができ、事後アンケートでも多くの方に満足していただきました。会場からの質問は途切れることがなく、終了後の懇親会にも多くの方に参加していただき、留学生に熱心に質問する姿が見られました。残念ながら今回は阪大卒業生の講演者をお招きすることができなかったのですが、次回は是非阪大出身の方にお話いただきたいと思っております。

渋谷洋平



京都大学 パネルディスカッションの様子

## 大阪府立大学 2011年12月27日

大学職員の皆さんからも暖かく歓迎いただいて、初めての留学説明会を府立大で開催して来ました。100人を超える参加者で会場が熱気に包まれる中、まず府立大出身で現在インペリアルカレッジ・ロンドン博士課程に留学中の関口雄介さん、そしてイェール大学博士課程の金子美穂さんが、自身の現在の留学生活について臨場感たっぷりに報告。その後、坂本が学位留学準備の進め方と、留学後のキャリアについて説明しました。4名のパネリストが加わってのパネルディスカッションでは会場から活発な質問が出て、パネリストが英語で回答するという一幕も。最後に当会長・小野雅裕が熱いメッセージで説明会を締め、それに呼応するように参加者の皆さんからは、「勇気をもらいました」「本気で生きてみようと思った」「留学についてだけではなく、さまざまに自分にとってプラスになる話が聞けた」と、熱い声をいただきました。

坂本啓



大阪府立大学 講演の様子

2012年3月15日(木)に米国大学院学生会のメンバーが名古屋大学で留学シンポジウムに参加します。

日時: 2012年3月15日(木)

9:30~12:30 (受付開始9:00)

会場: 文系総合館7階 カンファレンスホール

主催: 名古屋大学留学生センター海外留学室

後援: 米国大学院学生会

※参加希望者はメールまたは電話にてご連絡ください。

連絡先: TEL 052-789-2196, Email [abroad\[at\]jecis.nagoya-u.ac.jp](mailto:abroad[at]jecis.nagoya-u.ac.jp) (海外留学室)

## 専攻紹介「表現療法学科」

初刊から掲載されてきた「学科紹介」を改め、「専攻紹介」として新たに再スタートしました。今回は、高井暁さんがレズリー大学の表現療法学科を紹介します。音楽によって患者の人間らしさや自己表現を見つける治療法について研究しています。多彩なインターンシップを通じて、より実践的な経験を積むことができるユニークなプログラムです。

学生の街、マサチューセッツ州ケンブリッジにあるレズリー大学は、1909年に創立された私立大学です。大学院では、教育学科、異文化交流学科、カウンセリング学科などのプログラムが置かれており、私は表現療法 (Expressive Therapy) 学科という修士課程のプログラムの中で、音楽療法の実践や研究を行っています。表現療法学科では、臨床現場において、どのような芸術的テクニックが有効であるか、また、セラピスト自身がどのように自己表現をするかという実践や研究に力を入れています。表現療法学科の中には、私が専攻している音楽療法専攻の他に、ダンス療法や、主に美術的なテクニックを扱う芸術療法、ダンスや美術、音楽的なテクニックを幅広く扱う表現療法専攻があります。これらの専攻は一緒に授業を受けたり、同じ臨床現場に立ち、一緒に活動を行っています。対象者は、乳児から高齢者まで、対象となる疾患の種類は発達障害、メンタルヘルス、認知症など多岐に渡ります。

私は小さい時から音楽を学んでおり、日本では音楽教育の学士、その後アメリカに移って音楽療法の第二学士を取得しました。音楽療法と一口に言っても、そのアプローチの仕方は様々で、私は、レズリーのHumanisticと呼ばれる人間らしさや自己実現を大事にする指導や実践に興味を持ち、この学校への進学を決意しました。また、ボストンエリアという特殊な地域で、どのような音楽療法が行われているかということにも大変興味がありました。

表現療法学科には、毎年150人程度の修士課程の学生が入学します。また、博士課程に入学する学生は毎年15人ほどです。芸術療法専攻の学生が最も多く、毎年80人ほど、次いで、ダンス療法専攻、音楽療法専攻、表現療法専攻がそれぞれ20人ほどです。また、留学生は毎年、学部と大学院併せて30人ほどが入学します。ほとんどは大学院入学で、その半数以上は表現療法学科の生徒です。日本人留学生は少ないですが、様々な国から学生が来ており、台湾や韓国、ヨーロッパや南米からの留学生もいます。

このプログラムのユニークな点として挙げられるものは、修士課程に所属している学生の全員が、2年間のインターンシップを義務付けられていること、そして様々な授業を通して、繰り返し自己分析をすることです。1年目は週15時間のインターンシップ、2年目は週20時間のインターンシップが義務付けられており、インターンシップ先のスーパーバイザー指導のもと、実際の臨床現場での実践力を身に付けます。この経験の中では、クライアントのアセスメント(能力の評価や個人情報収集)方法、治療目的、ケーススタディの書き方なども学びます。



高井 暁 (たかい・あき)  
Lesley University  
Division of Expressive Therapies, Music Therapy Specialization

またレズリーの表現療法学科では、授業やインターンシップを通して、どのように人間関係の構築を行うべきかという議論が頻繁に行われます。クライアントやスーパーバイザーの存在が自分にどのような影響を及ぼしているか、うまく人間関係が築けていない場合はどのように対処すれば良いのか、日常で起こりうる問題や課題を、クラスメートや教授と共に解決していきます。また、Check-Inと呼ばれる、その日の自分の健康状態や精神状態がどのような状態かというチェックも頻繁に行われます。このサポート体制は表現療法学科独自のもので、お互いを尊敬し合い、支え合うというシステムが自然と成り立っています。

修士論文を書くにあたり、多くの学生は自分のインターンシップ先のクライアントか、自分で集めた被験者を対象として、臨床活動を行います。例としては、ゴスペルや宗教音楽がクライアントにどのような影響を及ぼすか、どのような楽器のテクニックがアルツハイマー病を持つクライアントのための治療に有効であるか、などのトピックがあげられます。私は、日本人のストレスマネジメントにおける音楽療法テクニックの有効性について、修士論文の執筆を進めています。

音楽療法をはじめ、芸術的なテクニックを使った療法活動は、歴史が浅く、一般的にあまり浸透していません。音楽を聴いたり演奏したりすることが健康に良いと分かっているにもかかわらず、専門的な職業として認知されるまでには、道のりが遠いのが現状です。その中で、大学院という高等教育の中で、表現療法を専攻することによって、臨床現場や一般社会で正しい理解を与える機会が増え、興味を持つクライアントや研究者、医療施設が増えるというような影響を与えてきました。レズリーの表現療法学科は、ここ数年非常に大きなプログラムになってきており、毎年100人以上の修士課程の学生が入学します。インターンシップ先も、人数に合わせて増えてきており、今後、地元の医療施設とレズリー、及び、医療職とセラピストとの連携は更に密になり、広がっていくと思います。



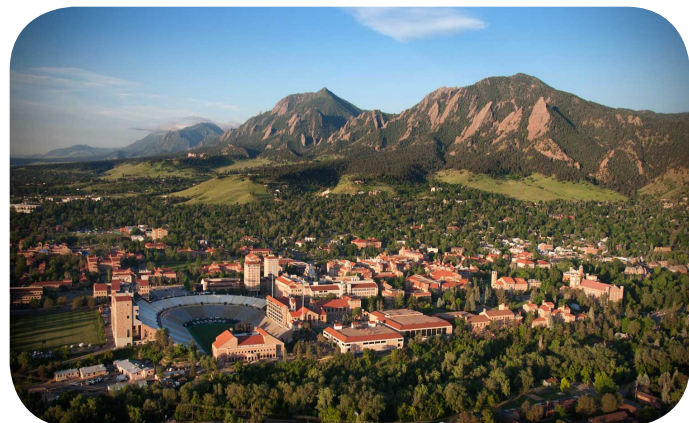
## 学部紹介「航空宇宙学科」

University of Colorado at Boulder (以下 コロラド大学), Department of Aerospace Engineering Sciences(航空宇宙学科)に在籍する学部2年生の山口晋弘(やまぐち・あきひろ)さんから学部紹介をして頂きます。2010年の春に日本の高校を卒業され、同年秋から学部生としてコロラド大学に入学されました。

### 1. 学部の授業・プログラムについて

コロラド大学は2学期制(セメスター制)をとっており、8月下旬から12月までの秋学期と1月から5月上旬までの春学期に分かれています。卒業には約120単位以上とることが必要で、学部生は毎学期約3から6つの授業(12から18単位)を受講します。大学1年目は、日本の数Ⅱ・Bレベルの数学や基礎的な物理・化学、ライティング等の教養の授業を受講し、学部2年目の1学期目からはより専門的な授業を受講します。私は航空宇宙学科なので、2年目の1学期では、熱・航空力学と構造力学を専門授業として受講しました。熱・航空力学では熱現象や航空機の翼の形状や空気等の流体が引き起こす現象について勉強し、構造力学では構造物に加わる荷重による構造物の変化の予測や分析等を学習しました。

授業の難易度は1年目と2年目では相当な差があり、留学生だけでなくアメリカ人の学生も本当に苦労しています。特に課題に要求される学習量が1年目に比べると非常に多くなりました。約2週間に1度の頻度で行われる中間試験、毎回の授業前に教科書の問題の解答提出、毎月3、4つの実験などなど。当然ながら、そのレポート提出、実験に関するプレゼンテーションの準備が同時に行われ、まるで学生はスーパーマンだと思われているのではないかと疑問に思うくらい半端ない量が要求されました。航空宇宙系の授業だけでこれだけあり、更に数学(Calculus)の授業や文系の授業を入れると、1週間休む暇なんてあり



University of Colorado at Boulder:キャンパス風景

ません。週末も課題やレポートで追われていたので、精神的にキツイ部分はありましたが、一方で夜中まで大学の実験室やパソコン室で実験グループのメンバーとああでもないこうでもない議論をしながら、また変なジョークも言いながらレポートを書くことが少し楽しめるようになったことは大きな成長だと思いません。

### 2. 休業中の過ごし方について

ハードな学期を終えると、今度は長い夏休みが始まります。夏休みは日本の多くの大学に比べて長く、5月上旬から8月下旬まで約4ヵ月間あります。学生は旅行をしたり、企業でのインターンシップやボランティア活動、大学のサマーコースで単位を取得したり、大学の研究室で研究に携わるなどしています。アメリカでは就職の際にインターンシップやクラブ活動、ボランティア経験などの学業以外の活動が大学の成績と同様に重視されているので、多くの学生が非常に積極的に様々な活動をしています。



Career and Internship Fairの様子

企業側もそのためのインターンシップ探しや就職活動をしている学生をスカウトするために、春・秋学期に学内で開催されるCareer and Internship Fairに来ます。多くの学生はそのイベントで担当者に質問をしたりレジュメを渡したりするために早い時期から準備をしており、そうしたインターンシップの獲得や就職活動を支援するためのキャリアサービスも学内で月1・2回の頻度で行われています。ちなみにそのインターンシップについて、特に航空宇宙の分野では国防等、軍事に関わる部分が多いため、「外国人お断り」がほとんどです。一方で、インターンではなくとも、研究室で研究をするなど、考え次第でできることはいくらかでもありそうだというのがアメリカに来て感じたことの1つでもあります。

### 3. 学業以外のプログラムについて

航空宇宙分野では、NASAが全米の大学や博物館等に科学教育のために出資するNational Space Grant College and Fellowship Programがあります。コロラド大学ではこのプログラムによる小型衛星製作が行われています。私も学部1年の1学期目にこのプロジェクトに参加して、Arduinoという電子基板を基にしたロボット製作を行いました。他にも様々なプロジェクトが行われています。クリーンルームにはこれから打ち上げられる衛星が置いてあり、管制室などでは現在運用中の衛星と通信を行っていて、非常にワクワクする現場でした。



山口晋弘(やまぐち・あきひろ)  
University of Colorado at Boulder  
Department of Aerospace Engineering and Sciences



コロラド大学で製作された人工衛星

#### 参考資料

- 1) Department of Aerospace Engineering and Sciences: <http://www.colorado.edu/aerospace/index.html>
- 2) University of Colorado at Boulder: <http://www.colorado.edu/>

学内には500を超える学生グループがあり、自分から積極的に動いていけば非常に色々なことができる環境ではありますが、逆に自分から動き出さなければ何も得られず、また誰からも何も与えられません。「明確な目標」が学部生活を大きく左右するカギなのです。

学部留学や米国留学について更に興味がある方は学部留學生のブログや米国の留学情報が掲載されている右記の米国大使館のサイトをご覧ください。HP:<http://connectusa.jp/>

また質問等ありましたらakihiro.yamaguchi[at]colorado.eduまでご連絡ください。

## 編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。<http://www.facebook.com/gakuiryugaku> こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります！

2012年度2月第8号を発行するにあたり、多くの読者の皆さんにご愛読いただいていることを心よりお礼致します。今号では、新たな試みとしてDallas Mavericksダンサーの海東奈月さんのインタビューを紹介し、海外でそして世界の最高峰で日々努力する姿は、分野は違えど、留学にも通じるものがあります。実際、インタビューでは本当に多くのことを学びました。一方で、留学を目指す上で、決意は人それぞれ異なります。この側面を紹介する留学体験記は、今までの異な

る視点で書かれており非常に興味深いものとなっております。2012年もどうぞよろしく願います。(平林)

こちらは例年より過ごしやすい暖冬のボストンで、来月初めのQualifying Examの準備をしている最中です。僕の学科(生物系)では筆記試験はなく、博士研究のプロポーザルを口頭発表し、プログラムの教員4人と2時間ほど質疑応答という形式です。これを突破すれば晴れてPh.D candidate、がんばります。(石原)

2012年はオリンピックの年であり、アメリカ・ロシア・中国・フランス・韓国などで国家元首が変わる年でもあります。私は、アメリカで給料をもらうようになってから政治に興味を持ち始めました。最近では共和党の大統領候補選が本格化しています。例えば、候補者同士がネガティブキャンペーンをするのですが、一国のリーダーの悪いところも良いところも理解するためと考えれば興味深い制度です。他の国々の選挙情勢に注目の一年です。(原)



## 寄稿: 米国大学院でしか学べないこと

バブル絶頂期。日本の技術力によって海外から得るものはないと言われる中、留学を決意した伊藤公平慶應義塾大学教授。昔も今も海外から学ぶことはたくさんある。20年後のリーダーの育成という観点から留学の重要性を説きます。

私がUC Berkeleyで修士・博士課程を過ごしたのは1989～1994年で日本のバブル経済絶頂期であった。日本の半導体産業が世界を席卷し、技術立国日本、Made in Japanが世界の頂にいた。そう、有頂天であった。当時、休暇でスイスの山頂を訪ねたとき、これまた世界の観光地を席卷した日本からの農協ツアー団体に遭遇して話しかけられた。「あなた日本人? えっ? アメリカで大学院生してるの! 理系? まだアメリカから学ぶ事ってあるの?」やれやれ、この質問には本当にまいった。学ぶことだらけなのに、農協相手に説得力をもって説明できない自分にまいった。

あれから20年が過ぎ、いつのまにか慶應理工の教授となり自分の研究室を構え、14名の博士が巣立つまでに時が過ぎた。それでも私は大志を抱く学部生には米国大学院に進学することを強く推奨している。その理由は今だからこそ説明できる。一言で言えば、米国大学院は20年後のリーダーを集める、そして彼らを競争させ協調させる。1995年の帰国以来、私が世界中の学会から招待され、様々な世界的な組織への協力が要請され、世界中の研究者と共同研究を進められるのは、米国大学院で世界中から集まる未来のリーダーとどのように議論し、競争し、協調すべきか? を学んだからだ。議論が日本で言うところの言い争いに行き着いたように見えても、実は議論であることが多い。指導教員との関係も厳しい。大学院前半(修士課程相当)なら教員に対するイエスマンで乗り切れるが、後半になると指導教員を越えるアイデアの提示と、教員を上手におだてながらいろいろと教えてあげる実力が要求される。一方、日本の研究室では、どうしても先輩が後輩の面倒をみてしまう。後輩は空気を読みながらある程度の礼を尽くし、先輩とのチームワークを重視する。この日本的な美しさに悪い事は1つも無いが、ここで育つと世界との競争と協調を学ぶことが難しい。私の研究室では努力を重ねた結果、1/3程が海外からの留学生であるが、皆、人格的に優れた人ばかりやってくる。あの、アメリカでの一発触発ムードは



伊藤公平(いとう・こうへい) 教授  
慶應義塾大学 理工学部物理情報工学科

なかなか作れない。だから私の研究室では博士課程後半の学生を共同研究先の米国または欧州の大学に1年間程度派遣するようにしている。この派遣自体、私が米国で学んだ交渉力の成果なのだが、派遣された学生は自分の博士を修了するためにも必死に向こうで研究に取り組む。自分の机をもらい、実験装置を使わせてもらうための交渉から始めるのだ。博士教育の一部を欧米大学に外注していることは承知だが仕方がない。

今、理工系で米国大学院に進学すると、中国、韓国、インドなどのアジア人に囲まれて、ネイティブな英語が学べず、米国に留学した気がしないという。これも当たり前。なぜなら、20年後の世界を動かすリーダーの分布がそうなるからだ。だから米国大学院は彼らを入学させて20年後に偉くなった彼らのネットワークの中心としての存在価値を高めようとする。そこに留学をしてPh.Dを取得することは、20年後のリーダーズクラブの一員になることを意味する。

確かに日本の大学の研究レベルは世界的にみてもトップだ。そう、閉じた研究は日本で学べる。でも我が国の発展に向けては、世界レベルでの競争と協調の最前線で活躍できる人材がもっと増えなければいけない。だからこそ、優秀な学生が日本でのところの安定を求めては、日本はますます不安定になる。年金、日航、東電などなど、世間の言う安定ほど不安定であることを我々は学んだではないか! だからこそ、米国大学院でまずは不安定を経験し、そして本当の、世界的な視野での安定を確立できる人間になろう!

米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

平林 正稔 石原 圭祐 原 健太郎 大勝 裕子 工藤 朗  
[newsletter@gakuiryugaku.net](mailto:newsletter@gakuiryugaku.net)

執筆者を募集中!

編集部では、留学体験記や各種のコラム(わが街紹介、学科紹介、お薦め本等)を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記編集部までご連絡下さい。